

徳法寺

旧盆と新盆

杉谷 伊吹

皆様こんにちは、如何お過ごしでしょうか。季節感皆無ですが、今回はお盆について書こうかと思えます。内容の一部が、徳法寺秋彼岸中日法要での法話と重複していますが、参詣に来られた方々は、ご了承ください。

何故お盆は旧盆と新盆（しんぼん）に分かれているのでしょうか？その答えに辿り着くには、まずお盆がどのような行事であるのかを知る必要があります。

お盆は正式名称を「盂蘭盆会（うらぼんえ）」といいます。盂蘭盆会は西暦538年に、中国（梁の時代）で始まった行事といわれております。日本国内では西暦606年（もしくは西暦657年）に行われたという記述が、『日本書紀』に残されています。当初の盂蘭盆会の内容は、中国で作られたとみられる『盂蘭盆経（うらぼんきょう）』という経典に沿って行われていました。『盂蘭盆経』を簡単に要約すると、「お釈迦様の弟子目連（もくれん）

の母親が、飢えと渴きの世界（餓鬼道）に落ちてしまいました。目連はお釈迦様の助言に従い、七月十五日に全ての僧侶に対して食べ物を施し、僧侶たちの力を借りて母親を救い出しました。お釈迦様は、後の人々も毎年七月十五日に父母や先祖の恩に感謝し供養するために、僧侶達に対して食べ物を施すよう勧めました。」という内容です。この『盂蘭盆経』を読むと、盂蘭盆会が七月十五日の行事であることは明白です。実際に明治五年までは、ほぼすべての地域で七月十五日を中心に行われていました。

しかし、明治時代に盂蘭盆会は大きな変化を迎えることとなります。明治維新（1868年）によって樹立された明治政府は、西洋の制度を導入して近代化を進めました。その一環として暦についても欧米との統一がはかられ、明治五年（1872年）の十一月には「来年からは新しい暦に切り替える」という発表がなされます。これにより、明治六年（1873年）からは「旧暦（太陰太陽暦）」に替わり、現在も使われている「新暦（太陽暦、グレゴリオ暦）」が採用されたのです。しかし、この改暦には準備期間がほとんどなかった為、新暦の適用にあたっては**明治五年を十二月二日で終わらせる**という力技がとられました。つまり旧暦における明治五年十二月三日が、新暦では明治六年一月一日になってしまったのです。これにより元来の季節と新しい暦には、**およそ一ヶ月もの誤差が生じ**ることとなり、人々は大いに混乱したのです。

その混乱の中、元来の季節通りにお盆を行おうとしたのが「旧盆」であり、新暦の月日に合わせてお盆を移行させたのが「新盆」なのです。

このように、旧盆は旧暦のおよそ七月十五日に対応しており、新盆は新暦の七月十五日に対応した行事です。どちらが正しいというものではなく、およそ百五十年前の政府の事情によって、現在の習慣に変わっていったのです。旧暦の風習が残っている文化は他にも、仙台の七夕や西本願寺の報恩講、中国の旧正月などもあります。今の宗教的な習慣には、改暦など明治以降の政治的な影響を受けているものも少なくありません。宗教的な教養ではありませんが、このようなことも知っておくと良いかもしれません。



盆踊りの練習をする娘の瑠唯

大阪万博所感

杉谷 淨

今年の七月月上旬に、娘の袖に手を引かれ、大阪万博に行ってきました。前回の大阪万博は家庭の事情で行くことができなかつたので、今回が初めての万博になりました。

朝九時の入場予約で入り、午後六時過ぎまでひたすらパビリオンを回りました。平日ということもあり、予約が無いと入れないパビリオンや、一時間を超える待ち時間のパビリオンはあきらめました。それでも二十館ほどを回る事ができました。

それぞれのパビリオンは、その国が見せたいと思っている自分の国を象徴的に表していました。いかに自分の国が勝れているのかを見せつけるようなパビリオンもあれば、その国が今どのようなことに一番関心を寄せているのかを表しているパビリオンもありました。歴史に重点を置いているパビリオンもあれば、未来に目をむけているものもありました。ウクライナのコーナーでは、現在の人々の様子を映像データで流すと共に、銃弾の跡がついている展示物を置くことで、今の状況を知ってもらいたいという思いが伝わってきました。

勿論、展示内容そのものも面白かったのですが、それ以上にそれぞれの国が何を大切にしているのかわかることができました。自分の国の文化に誇りをもつことは悪い事ではありませんが、それが他の国を上から目線で見るようなものであると、それがど

れほど素晴らしいものであつたとしても、純粹に称讃することができませんでした。また、国内に多くの生活困窮者を抱えている国が、自国の豊かさを主張していても、やはり素直に受け取れることは出来ませんでした。一方で、派手な展示ではなくても、自分の国に対する愛情を感じることが出来るものを見ると心が温かくなりました。

万博のパビリオンで感じたようなことは、個人や組織、地域に関しても同じように感じるがあります。個人で言えば、あまりにも自慢話が過ぎる人、他人を見下している人、誰かを踏み台にして自分だけが良い思いをしている人の話を聞くと、たとえばどれほどの実績があつたとしても、聞いている私の心が沈んでしまいます。逆に、周り比べて秀でたところが無くても、今の自分やその環境を大切に思っている人は、私の心まで温かくしてくれます。

組織や地域でも、自分の属しているところに愛情を持つことは良いのですが、それが行きすぎた愛国心や、他を蔑視するような発言を見ると、心が暗くなります。自分たちの豊かさが、他の地域の貧困の上に成り立っていることに目をつぶっているのを見ると、わざわざわした気持ちになりにくいです。大変な境遇にありながらも前向きに生きている姿は、私の大きな励みになります。

この様に、共感できる価値観もあればできないものもあるのですが、たとえ共感できないものであつたとしても、それはそれとして否定すべきも

のではないとも感じています。勿論肯定することは出来ないのですが、共感できないものが劣っている、若しくは悪であるとは言えないからです。それは、私とは違う経験の上に出発上がっているものであつて、決して優劣・正邪の問題ではないということです。違う価値観の者同士でも、それぞれを否定することなく互いを認めていく中で、次第に共通点が増えていくのではないかと思います。

万博を通して、今、日本で、そして世界で広がっている自国中心的・排他的な風潮が、少しでも良い方向に変わってくれる事を願っています。



大阪万博 ガンダム館

映画の紹介

『大長編 タローマン』

万博大爆発』

監督・脚本・藤井亮

2025年

杉谷紬

皆様は『TAROMAN 岡本太郎式特撮活劇』という番組をご存じでしょうか。2022年に『展覧会 岡本太郎』の開催に合わせNHK Eテレで放送



されたシリーズで「1972年の特撮番組の再放送」という架空の設定で発表されました。岡本太郎の作品たちが「奇獣」と呼ばれる怪獣として登場し、「タローマン」と対峙するというのが大まかなストーリーであり、特撮の枠組みを用いつつ岡本太郎の作品と言葉を伝える内容となっています。

今年の八月二十二日に映画『大長編 タローマン 万博大爆発』が公開されました。映画では1970年の大阪万博、そして2025年の未来都市や未来の万博が登場します。ただし、この映画における2025年は「1970年代頃に想像されていた未来像」を元にした架空のもので、実際の現代とは大分様子が異なります。例えば劇中の2025年では「常識」が秩序を守るために徹底的に重んじられており、「常識力」が足りないといされると都市に住めないことや、「常識人間」らしからぬ行動が逮捕に繋がることが描写されます。

この作品において、通常悪い意味では使われない「常識」が「でたらめ」を代名詞とする「タローマン」へのアンチテーゼとして強調されている点に興味深いです。架空の2025年社会ほど極端ではないにせよ、現代でも「常識」に沿った行動をすることは社会生活を送る上で重要です。しかしこの映画で「常識」などお構いなしの「タローマン」を見て眉を顰めるのではなく、カタルシスを得ている

のはきつと私だけではないでしょう。

映画で1970年から来た人物が2025年の「常識」を知らず知らずのうちに破ってしまうように、「常識」は属している社会や時代が変わればどこか異なってくるものです。また2025年の少女が「常識」を教える先生ロボットに反抗する描写で示されるように、「常識」は自分の内なる考えではなく、周囲から押し付けられた行動規範であるともいえま。私たちは普段、曖昧かつ強制力のある「常識」に気がつかない続けることへの息苦しさを内心覚えつつ、それでも自分の立場を守るためと信じて密かに耐え忍んでいるのかもしれない。

「でたらめ」な「タローマン」は正義の味方でも、人類の味方でも、我々の規範となる存在でもありません。それでも、「常識」にとらわれたり、振り回されたりしすぎて苦しい時、「でたらめ」を意識することで自分の状態が相対化され、心の舵取りを助けてくれるように思います。「タローマン」の「でたらめ」についてはこの稿にて十分に説明できませんでしたが、興味を持たれた方は是非『タローマン』シリーズをご視聴ください。

*、岡本太郎（1911～1996）画業や執筆業等で幅広く活動。1970年の大阪万博にて『太陽の塔』を手掛けた。

*、タローマン 『タローマン』シリーズのメインキャラクター。岡本太郎の作品『若い太陽の塔』他がモチーフとなっている。

徳法寺からのご案内

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺前任職 杉谷淨

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

十一月 足利仏教 十六 織田・羽柴政権1
十二月・一月・二月はお休みします。

三月 足利仏教 十七 織田・羽柴政権2

さらに足利時代の話が続きます。最初は、日本人なら誰でも知っている織田信長と豊臣秀吉です。

この二人は、小説や映画、ドラマなどでよく取り上げられていることから、実際よりはかなり誇大評価されているようです。確かに個性的ではあります。比叡山焼き討ちや身分にとられない人材登用などは、管領・細川政元の方が先ですし、地方豪族出身で始めて天下人となったのは三好長慶の方が先でした。奇人としても細川政元の方が上かもしれません。

秀吉も、従来は豊臣秀吉と呼ばれることが多かったのですが、近年は羽柴秀吉というほうが正確であるとされています。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219
ホームページ <http://tokuhou-ji.com>

令和八年

年忌法要のご案内

一周忌法要 令和七年死去

三回忌法要 令和六年死去

七回忌法要 令和二年死去

十三回忌法要 平成二十六年死去

十七回忌法要 平成二十二年死去

二十五回忌法要 平成十四年死去

三十三回忌法要 平成六年死去

五十回忌法要 昭和五十二年死去